

アジアの建築遺産と保護協力の仕事

友田 正彦

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

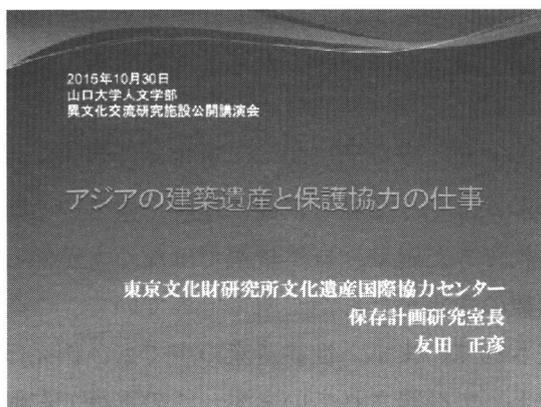
保存計画研究室長

人文学部異文化交流研究施設第 30 回講演会

2015 年 10 月 30 日

皆さんこんにちは。ただいま御紹介いただきました東京文化財研究所の友田正彦と申します。

今、身に余る御紹介をいただきましたが、建築史というのは確かに少し変わった分野です。私は早稲田大学の出身ですが、建築史は理工学部にありました（現在、早稲田大学創造理工学部建築学科建築史研究室）。大体どこの大学でも歴史といえば文科系ですが、建築史という分野に限っては建築の一部ということで工学系に入っているのが普通です。自分が学生の頃も、理工学部にいると「何でお前のところは歴史をやってるんだ」と言われ、片や歴史や考古学の授業にも個人的に関心があってよく文学部にも聴講に行きましたが、そうすると「何で理科の教室の人がこんな授業を受けに来るんだ」といつも言われていました。このように、鳥だか獣だかよくわからないコウモリのようなのが建築史だというのが当時の世間の認識でしたが、最近は学際的な分野も色々増えてきましたので、理科と文科という垣根も当時よりは低くなっているのではないかと思います。



本日のお話

- 1. 文化遺産保護国際協力とは
- 2. アジアの建築遺産との関わり
- 3. 課題と関心の所在
- 4. 「異文化交流」について思うこと

さて、私が今日お話する内容は、「アジアの建築遺産と保護協力の仕事」というタイトルをつけさせていただきました。

私が属しているのは、東京文化財研究所（独立行政法人国立文化財機構に属する 4 国立博物館、2 文化財研究所の一つ）という組織の文化遺産国際協力センターという部門です。

そこで、今日は、お話する内容を大きく 4 つに分けてみました。

まず、あまりなじみのない方もおられると思うので、文化遺産の保護国際協力とはどのような仕事なのかということ、最初に簡単にお話したいと思います。それから、今日のお話の主題として、私がこれまでに係ってきたアジアの、特に建築的な文化遺産の仕事について幾つかの事例を御紹介したいと思います。その後、そのような建築遺産保護という仕事の中でどのような問題があるのか、

いつもどのような問題意識を持ちながら私が仕事をしているのかについてお話します。そして最後に、お招きいただきました異文化交流研究施設に敬意を表して、異文化交流とはどのようなことなのかについて私が個人的に思うところを一言だけお話をして終わりたいと思います。

1. 文化遺産保護国際協力とは

まず、文化遺産保護国際協力、文字の通りで、文化的な遺産を保護するための国際的な協力事業ということですが、いくつかの部分に分けてご説明します。

まず文化遺産ですが、文化遺産と一口に言っても色々あります。これが全部ではありませんが、ここに幾つかの 카테고리分けをしてみました。



一般的には建造物を最初にイメージされる方が多いのではないかと思います。左上の写真はミャンマーのお寺ですが、日本なら例えば世界遺産になっている法隆寺とか姫路城、あるいはエジプトのピラミッドなども建造物です。

町並み、これも建築ですが、単体の建物ではなく沢山の建物が群として形づくる景観を町並みと呼んでいます。日本なら例えば五箇山の合掌造などが町並み景観として世界遺産にもなっています。左下の写真はラ

オスのルアン普拉バンというところだと思います。

埋蔵文化財、今ちょうど真ん中上の写真にある兵馬俑の展覧会が私の研究所のすぐ隣にある東京国立博物館で始まった（特別展「始皇帝と大兵馬俑」が2015年10月27日（火）～2016年2月21日（日）まで平成館で開催）ところですが、地面の下に埋まっていて発掘されて初めて目に触れることができる埋蔵文化財、遺物だけでなく遺構も含めて考古学の対象となるようなもの、これも文化遺産です。

それから、比較的最近になって出てきた新しい概念として、文化的景観——カルチュラル・ランドスケープというものがあります。これはちょっとわかりにくくて私も正確に理解できているか自信がありませんが、人間が係ることによって形づくられてきた風景、自然景観ではなく人が係ってつくられた景観を指します。最近では日本でも文化的景観の指定がだんだん増えてきていて、このような棚田の風景も幾つか文化的景観として文化財指定されています。世界遺産の中でも、例えば真ん中の下の写真にあるフィリピンの棚田が文化的景観として登録されています。この写真で左側に挙げた4つ（建造物・町並み・埋蔵文化財・文化的景観）はいずれも、世界遺産条約でいうところの文化遺産に含まれるものです。

一方で、文化遺産でも世界遺産に含まれないものもあります。その例が動産です。先ほどのものは全部不動産ですが、動かせるもの、動産である工芸品などは世界遺産条約の対象にはならないけれども、れっきとした文化遺産、有形の文化遺産です。

文化遺産には、もう一つ無形遺産というものがあります。ユネスコの中でも世界遺産条約とは別に無形文化遺産保護条約というのがあって、日本からも色々なものが無形遺産として登録されています。芸能やお祭りなども無形遺産ですし、風俗とか言語、習慣などまで全部含めて無形遺産ということになります。

私が主に扱っているのは、左側の3つ、建築を中心に、町並み、考古遺跡などです。文化的景観や工芸品についても係ることはありますが、専門分野ではありません。工芸品に関しても無形遺産についても当然、国際協力は行われていて、私どもの研究所でもそういった活動はありますが、別のセクション（保存修復科学センター・無形文化遺産部）が担当しているので、私が直接無形遺産の国際協力に係ることはほとんどありません。

次に、文化遺産の国際協力は誰がやっているのかと言えば、まずはユネスコに代表される国際機関があります。それから各国で国際協力を支援する機関、日本なら代表的なのがJICA（独立行政法人国際協力機構）です。それから、山口大学や東京文化財研究所のような、研究機関や大学などの教育研究機関。民間の財団には文化財を専門とするものもあれば、広く文化全般の事業を行っている財団もあります。それからNGO、これも同様です。様々な分野の一部として文化遺産が扱われることもあれば、文化遺産だけを扱うNGOもあります。そのほか、個人や企業なども色々な形で協力に係っています。

1-2 協力の主体と体制

- 国際機関 ユネスコなど
- 各国の国際協力支援機関 国際協力機構(JICA)など
- 大学・研究機関
- 民間財団等
- NGO
- その他 企業・個人など

- 財源(ドナー)と実施機関は異なる場合が多い。
- 専門家もしくはチームの多くは実施機関外より参加。多国籍の場合も。
- 支援対象国と共同で実施するが、協働の形はさまざま。

実際、お金がどこから出るのかというと、基本的には公共の事業であれば皆さんの税金が元になって行われるわけですが、民間の企業や財団からお金が出ているケースももちろんあります。ただ、お金の出所と実際に協力事業を行う機関とは必ずしも一致しません。我々がやっている仕事でもそうですが、他からお金をいただいてきて実施するというケースのほうが多いと思います。

それから、協力事業を行うときには、様々な専門家が参加しますが、そのような専門家が全部その実施機関に備わっているのかといえ、決してそのようなことはありません。私は建築が専門ですので、建築に関する部分は自分でもやりますが、それ以外は、その対象物、あるいは事業の内容に応じて大学の先生であるとか企業の方であるとか専門家の方に個人、またはチームでお願いして手伝っていただくこととなります。もちろん、日本人だけでなく外国人の方と組むこともしばしばあります。

私どもの事業の場合は、基本的には国と国との関係の中で行っていますので、相手国の文化財担当機関等と協力して行うケースがほとんどです。実際そのようにしたほうが外国では活動がしやすいということももちろんありますが、それ以外にも色々な理由がありまして、これについてはこの後でお話したいと思います。

1-4 関連する主な研究分野

- 発見と解明 調査や探査の技術など。
- 価値の評価 位置づけのための比較研究など。
- 計画 価値の向上に向けた検討など。
- 保存修復 状態の改善・回復のための技術など。
- 管理活用 良好な維持と価値の活用のための技術など。
- その他

建築遺産の場合

- 考古学、歴史学、美術学、建築学、構造学、文化人類学、社会学、都市・地域計画学、材料学、岩石学、地質学、生物学、保存科学、環境工学、情報学、観光学...

実際にどのようなことをやるのかを簡単に分けると、まずは文化財そのものを直す保存修復の仕事のみずからやる。他の国に何か文化財があるときに、日本から日本人の専門家がそこに行って作業をして実際に直して帰ってくる。あるいは、動産の場合ですと、例えばうちの研究所でも、海外の博物館にある屏風とか掛け軸といった日本美術品をお借りして来て、こちらで直してお返しする、そのようなこともやっています。

それに対して、技術支援という形もあります。ある

国に技術がない、あるいは専門家がないということがあった場合に、そのお手伝いをしようということですが、計画をつくるという形の支援もあれば、実際に調査を行うという形の支援もありますし、あるいは保存修復の作業のある部分、特に専門技術を必要とする部分を担当するというようなこともあります。基本的には人材を派遣する、専門家を派遣することを中心に行われるのが技術支援です。

ただ、修復を実施するにしても技術支援をするにしても、物自体は直すわけですが、そのような文化財をきちんと直せる、あるいは管理できるような体制がその国に無ければ、一度直したとしてもまた壊れてしまったらどうすることもできないということが起こってしまいます。

そこで重要になるのが人材育成です。国によって状況は違いますが、どこの国にもそれなりの文化財管理機関というものは存在します。ただ、そこに十分な技術や人材が無いことが、特に発展途上国においては普通ですので、そのような国々の専門家、あるいは技術者を養成するお手伝いをします。技術移転という言い方も良いかもしれませんが、具体的には、例えば石でできたものを保存する技術というテーマがあったとします。そうすると、そのようなテーマでトレーニングコースを組んで先生を派遣して研修をやるというやり方が一つ、それから、先ほど言ったように修復の実施や技術支援といった作業を共同で行う、実際には日本側が主導する場合がありますが、先方の国の専門家、技術者にも参加してもらって一緒に作業をしながらその作業の仕方を覚えてもらう、オン・ザ・ジョブ・トレーニング、仕事をしながら技術を身につけるといったやり方もあります。

さらに、ある程度の専門性が既に備わっている場合、対象国に専門家がいる、あるいはきちんとした機関がある場合には、共同研究という形ももちろんあります。その国の文化財に関してはその国の方のほうが詳しいということは沢山あるわけで、その国の文化的な背景だとか歴史的な背景などはなかなかぱっと行ってわかるものではありません。そういった意味でそれぞれの国の専門的な知識をこちらとしても必要としますし、テーマによっては日本で行われていないことが外国では行われているということも当然ありますので、日本側もそのような共同研究を通じて様々なことを学んでいくわけです。

もちろん協力事業のあり方としては、お金だけを出すこともありますし、資材や機材だけを差し上げますということもあります。ただ、ほとんどの場合はそのような形ではなく、お金も出すけれども内容に関しても係らせてくださいねという形で協力が行われています。お金はあげたけれどもそれがどのように使われたかわからない、あるいは、機材はあげたけれどもそれによって文化財が壊されたということでは困りますので、やはり、支援をするからにはきちんとしたやり方をしなければいけないということを保障する意味でも、実績のある専門家が係った形で行われるのが、お金を出す立場としても安心ということかと思えます。

国際協力は、2国間で行われる場合がもちろん多いですが、必ずしも2カ国、日本とどこかの国という形だけではありません。複数の国が一つの国を支援することもあれば、一つの事業の中で複数国を支援することもあります。色々な形があります。

先ほど専門家を派遣するという話をしましたが、特に人材育成に関しては招聘という形もあります。相手国の方に日本に来ていただいて研修を行う。日本から多くの分野の人を連れていくとお金もかかりますし、現地には必要な機材や設備が無いこともありますので、特に実験を伴うような研修を行おうとすると、招聘できちんと設備の整ったところで色々な講師に参加していただけたほうが効率的ということがあります。

それから、沢山の国の方に同じようなテーマで研修を行うことは、なかなか現地ではやりにくいですが、日本に呼んで来る形であれば、当然そのようなこともできるわけです。外に出て行く場合でも、相手の国、研修を行う国の方だけでなく周りの国の人も一緒にそこに来て研修に参加してもらうという形も、最近だんだん増えてきています。マルチラテラル——多国間協力という形です。日本と発展途上国では状況が異なることも多いですが、同じような事情を抱えている同士の専門家が話をすると、もっと実感を持って取り組めるということがあります。例えば、東南アジアの幾つかの国の人にタイに集まってもらって研修をしたとすると、日本から教えるだけでなく、お互いに、あなたの国でもそうなのか、うちの国ではこうやっていますというような話をしてもらうことで、より実践的な知識経験を身につけてもらえるというのがメリットだと思います。

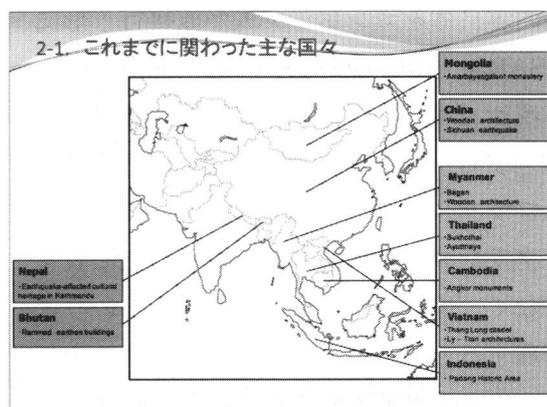
今、幾つか分類しましたが、一つ一つの事業にどれかの形が対応しているわけではなくて、実際には幾つかの形を、修復も行うけれども同時に人材育成を行う、技術支援をしながら共同研究も進める、というように組み合わせながらパッケージとして行っているケースのほうが多いと思います。

どのような専門の人が係っているのかについては、色々な分け方があると思いますが、例えば、遺跡を扱うのであれば遺跡を発見するための調査とか探査といった技術が必要です。それから、遺跡を保存する上でそれがどういう価値を持っているのかを評価しなければならない。比較研究、歴史とか美術というような分野が代表的だと思います。さらに、価値を評価した上で、それをどのように向上させていくのかについては、計画という分野があります。具体的に壊れているとか傷んでいる物を改善、回復するための技術としては、保存修復という分野があります。管理活用というのわかりにくいかもしれませんが、ただ単に物を残すだけでなく、それを良い状態で維持しつつ、さらになるべく使いながら残していこうという発想があります。その維持とかどのように遺跡の価値を活用するのかについて検討、研究する分野もあります。

本当に事業と対象によって様々ですが、建築遺産を扱う場合でもここに挙げたように非常に多くの分野の専門家が、もちろん全部ではありませんが、内容に応じて係ってくるということで、当然うちの研究所にもこのように様々な分野の専門家はいませんので、必要な分野に応じて他の研究機関や、大学の先生、民間の方、そのような方々に声をかけて事業に参加していただいています。

2. アジアの建築遺産との関わり

さて、前置きが長くなりましたが、これから具体的に私が今まで係ってきた事業の幾つかを御紹介したいと思います。



アジアの建築遺産と書きました。私は主には東南アジアで仕事をしていますが、仕事として係った主な国を左の地図に挙げています。右下の緑色の部分がミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナム、インドネシア、これは東南アジアです。他にも、モンゴルや中国、普通は南アジアに分類されるネパールやブータン、そのような所でも仕事をしています。東南アジアについては、ASEANが今10カ国ありますので、そのうちの半分の国では仕事をしているということになります。

私が一番最初に本格的に遺跡の保存修復に、あるいは国際協力に係ったのはカンボジアのアン

コール遺跡です。大学を出てから設計事務所に勤めていましたが、そこを辞めてから少しタイで働いた後にカンボジアに行きました。私がいたのは94～97年で、その後ずっと今までカンボジアとは係りが続いています。



アンコールは有名な遺跡なので皆さん御存知かと思いますが、9～14世紀頃に栄えたアンコール朝というクメール人の国の都があった場所です。主には石や煉瓦で造られた寺院や都市施設が残っています。右下の航空写真で左側に青い水面が見えているのは貯水池ですが、非常に規模の大きなものです。真ん中のアンコール・トムという都城が3キロ四方ぐらいありますので、非常に大規模だということがおわかりいただけると思います。

けると思います。

アンコール・トムは12～13世紀にかけての都城ですが、その中心にあるバイヨンという仏教寺院の修復に私は直接係っていました。右上に見える、本当に小さいですが、北経蔵という四角い建物、この大きな寺院の中のほんの一部分、一つの建物を3年間私が係って、実は私がいる間にはまだ全部終わらなかったのですが、その後も何年かかかって修復しました。この他にも2つの遺跡を扱っていましたが、この事業自体は今もまだ続いています。JSA・日本国政府アンコール遺跡救済チームというのをづくり、主には日本の外務省がユネスコに毎年拠出をしている基金を使って



行ってきた事業です。これまで日本が係った遺跡修復としては最も規模の大きな事業です。また、修復自体を直接行ったという例もあまり多くはありません。何故かという、御存知のようにカンボジアは長い間内戦に苦しんで、その中で遺跡の保存も完全に中断してしまったという経緯があります。専門家も技術者も全然いないという状況の中で、遺跡はどんどん壊れていく。カンボジアが平和を回復して復興する中で日本は様々な支援を行ったわけですが、政治経済だけでなく、

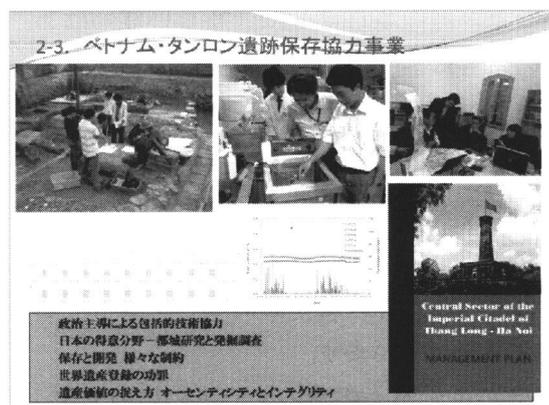
文化の面でも協力をしようということで、その大きな柱としてこのアンコール遺跡が取り上げられたわけです。最初は日本人の専門家が大量に入って、技術者を育てることをしながら様々な調査を行い、最終的にははどんどん専門家が育って、今では事業の内容自体をカンボジア人が直接行う形にかなりの部分変わってきています。カンボジア政府が APSARA という遺跡保存の専門機関を設立して、その中で多くの専門家が育ってきているというのが現状です。

ここに国際キャンペーン、または修復オリンピックと書きましたが、日本だけでなく様々な国がアンコールでの事業に参加しました。カンボジアは以前はフランスの植民地でしたので、この遺跡の保存もフランスが100年以上前から行ってきました。フランスが蓄積してきた土台の上に我々も乗っかっている部分があるのですが、やはりそれだけでなく、何か新しいことをやろうということで色々と試行錯誤しました。なるべく解体をしないで修理するとか、あるいは、フランスのやり方ではコンクリートをかなり大々的に使っていましたが、コンクリートもいつまで持つかかわらない色々問題があるのでコンクリートを使わずにできないか、本来それで建っていたのだから何と

かなるだろうということで、本来の造り方などを研究して、きちんと構造的にも持つということを検証した上で、なるべく当初のやり方に倣って再構築するというを試みています。つまり、建物自体を直すということもさることながら、そのような事業を行う過程で人を育てるとか、新しい技術を開発する、その技術を使ってまたカンボジアの人が次の遺跡を直すという体制をつくるのが一番大きな目的だったのだらうと思っています。私がJ S Aの初代の現地所長でしたが、最盛期には130人ぐらいの作業員さんがいて、近くの村の人で全然このようなことをやったこともない人たちなんですが、発掘の仕方からクレーンの操作まで全部、日本からそういう専門家の方を連れて来て教えてもらう、そのようなことをやっていました。



次に、これは私が東京文化財研究所に来てからの、もう少し最近の仕事ですが、ベトナムのタンロン遺跡という都城遺跡で、ベトナムの首都のハノイの町のど真ん中にあります。国会議事堂を建てかえるので事前に発掘調査をしたところ、昔の宮殿の遺構が沢山発見されて、奈文研（奈良文化財研究所、東京文化財研究所とともに国立文化財機構の傘下）をはじめ都城の研究調査に関して蓄積のある日本に支援してほしいというベトナム側からの要請で始まった協力事業です。ベトナムは昔、中国に支配されていた時代が1000年ぐらいあるのです。そこから西暦でいうと1010年に初めて独立した李朝という王朝ができて、タンロンがその首都になった。タンロンというのはハノイの昔の名前です。この時からタンロンが始まったと一般のベトナム人は思っていますが、実は中国支配時代からここには拠点があって、一説によると阿倍仲麻呂が長官をしていた安南都護府もここだと言われています。間違いなく11世紀のタンロン城よりもさらに下から多くの遺構が出てきていますので、中国支配の時代から拠点だった所を、ベトナムの独立王朝ができて拠点として作りかえたのだと思います。その後も、一時期を除いてずっとここが、拠点として続いてきて、最終的には植民地時代からベトナム戦争の時代まで軍がここを使っていました。司令部だった施設が今でも残っています。ですから、近代まで含めて様々な時代の遺跡が重層しているのが、タンロン遺跡の特徴であり価値であるということになります。考古学的な遺跡があれば、地上に残っている建物としては植民地時代の建物もあります。黄色い線で囲ったところが、一番最後のグエン朝という時期の城の範囲ですが、これが2010年に世界遺産になった時に、赤い線で囲ったコアゾーンと書いた範囲だけが登録されています。これ以外の所は国防省が使っていたり外務省が使っていたりということで、残念ながら



遺跡として保存することができていません。

この協力事業もユネスコ日本信託基金をはじめ、文化庁の予算なども合わせて使っていますが、様々な分野が協力をしました。考古学や保存科学、植民地時代の建物の図面も無かったので我々が現地の人と一緒に実測をして図面を作りましたし、あるいは、右下に表紙が写っていますが保存管理計画も作りました。

その背景にはかなり政治的な要素もあって、小泉首

相の時に支援の約束をして、その前から日本人の専門家は入っていたのですが、かなり大きなお金をどんとつけてしまったんです。そのために、かなり総花的と言っははいけません、多くの分野の協力を行って資源が拡散してしまった嫌いがあります。もうちょっと分野を絞って集中的にやったほうがよかったのではないかと私自身は思っています。協力事業の最中に、1010年の建都から1000周年にあたる2010年にどうしてもこれを世界遺産にするのだとベトナム政府が言い出しました。きちんとした管理計画とか、先ほどの保存範囲にしても色々未解決の問題が沢山あるんですが、どうしても2010年に世界遺産にしなければいけないという圧力があって、しかも世界遺産委員会でもそれが通ってしまうというのが不思議なところなんです、実際に世界遺産になってしまいました。なってしまうと、良かったよかったということで急に地元の方々の意欲が萎えるんです。我々は協力を続けていても、世界遺産になったからいいやという感じで、途端に色々なことが動かなくなるということがありました。専門用語になりますが、遺跡の全体がきちんと保存されているかというのをインティグリティ=完全性といい、遺跡の価値の本物が残っているかをオーセンティシティ=本物らしさといいます。本物らしさという意味で言うと、地上に建っている植民地時代の建物は間違いなく本物です。地下に埋まっている遺構も本物ですが、その遺構の上にどんな建物が建っていたかは、実は今はわからない。瓦などが沢山出てきますので木造の建物があったことは間違いのないのですが、どのような建物だったかはわからないのです。けれども、ベトナム人からすると、初めて中国の支配を脱して独立国の都ができたということが彼らにとっての重要な価値ですから、どうしても初期の李朝や陳朝、11～13世紀頃の遺構が彼らにとっては一番重要で、植民地時代の遺構などはあまり顧みられないのが実情です。城の中心に敬天殿という、日本の古代都城で言えば大極殿に相当する建物があったのですが、基壇だけが残っていて、その上にフランス時代の軍司令部の建物が今建っています。19世紀の終わりですから日本だったらきっと重要文化財になっている時代の建物ですが、取り壊して敬天殿を再建しようということが盛んに言われています。そのようなことをしたら世界遺産でなくなると言っても、なかなか理解してもらえない状況があります。



次の事業は、まさに始めたばかりですが、今年(2015年)の4月25日にネパールで大地震がありました。それによって、世界遺産になっているカトマンズ盆地の、カトマンズ、パタン、バクタプルという3つの昔の都の王宮や寺院、本当に町じゅうにお寺があるようなところなのですが、それから歴史的な町並みなどが沢山壊れました。新しい建物はあまり壊れていませんが、古い建物が集中的に壊れてしまったので、緊急的な支援事業を始めました。文化庁に緊急支援用の予算がありまして、このお金を使って委託事業として私の研究所が行っています。

左側の写真が王宮ですが、この左側にある塔の一番上の階が完全に無くなってしまっている。崩れるときに下の階も壊してしまったという状況です。

中央上に、煉瓦で造った段々の台が見えます。この台の上に木造と煉瓦造の混構造の三重塔が建っていたのですが、それが完全に崩壊してしまって、台だけが残っています。

下の写真は、後ろの木造と煉瓦の混構造の建物は傷んではいますが一応建っているのに対して、

手前の石造の塔が崩れている。右側も同様、煉瓦と木造の混構造の建物が壊れている状況です。



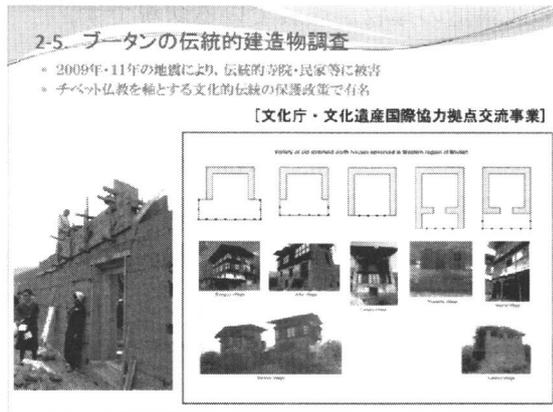
ここでやっているのは、まず緊急事業ということで、このような壊れた建物を安全に、それ以上壊れないようにすることと、壊れた建物から集められた部材をきちんと管理して、修理のときに使えるようにすること。それから、これから修理、再建をするにあたって、何故壊れてしまったのかを特に構造力学という専門分野から分析して、どのような壊れ方をしたのか。あるいは、どのような部分を補強すれば壊れないのかについて研究しようというのが主な内容です。

それと同時に、町並みの復興に関しても、これからどんどん建物が再建されていくと思いますが、これまでの歴史的な景観をいかに残しながら復興していけば良いのか、ガイドラインのようなものを地元の方と一緒に作っていきようとしています。日本は地震国ですから耐震技術は非常に発達していますし、それから木造建物の修理に関する技術、そのような日本の得意分野を活かして協力をしていこうとしています。

ただ、災害復興事業に対しては、東日本大震災の時もそうでしたが、このような緊急事態に何で文化遺産なんだ、もっと食べ物とか水のほうが大事ではないかという声があります。それはもちろん正論で、大きなお金を使ってこのような事業をやることに我々もジレンマを感じる時はあります。それでも、やはり、ある程度事態が落ち着いて、東北でもそうでしたが、これから先どのようにしてゆこうかという時に、自分たちの歴史・文化がきちんと残っていることがその地元の方々の心の拠り所として非常に重要なので、それを緊急事態だからといって放っておくのではなく、なるべく早いうちに手を打って、後になって後悔することがないようにしようというのが私たちの考え方です。

ブータンでも仕事をしています。これももとは地震がきっかけです。2009年と11年に、ネパールのものほどの大地震ではありませんが、ここでも多くのお寺や民家が壊れました。皆さんも御存じのように、ブータンというのは非常に文化的伝統を重んじている国で、鎖国に近い状態がずっと長く続いていたこともあって、今でも非常にすばらしい景観が残っています。ところが、この地震でこのような伝統的な建物が壊れたので、安全性の面からコンクリートの建物にこれからは変えていこうという発想がありました。そのようになったら、文化的な伝統あるいは風景が変わってしまうことを恐れて、ブータンの文化省から何とかならないかと協力を求めてこられたのがそもそもきっかけです。

版築造と言いますが、型枠の中で土を突き固めて壁を造るんです。床や屋根は木で造るのですが、この版築造という建物がブータンには特に多くて、版築造の耐震評価は世界中で多分誰もやっていない分野です。ですから、構造の専門家チームと組んで、我々は建築史ということで、そのような建物にどのような伝統的な技術が使われていて、何を残していけば価値を残したことになるのか、というような部分の調査を平行して行ってきました。

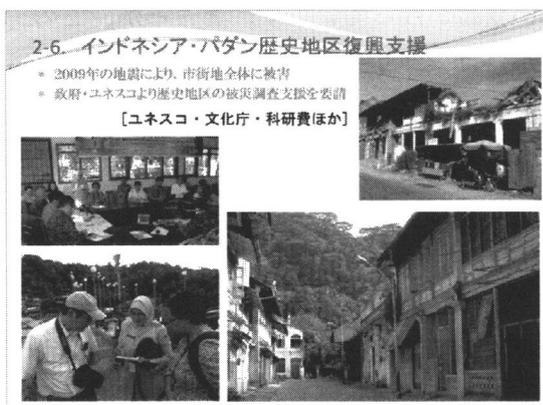


そのようなことがだんだん見えてくるわけです。そういう調査を今も継続して行っています。これは調査の一部ですが、地震で壊れたときに、ネパールでもそうなのですが、壊れないとわからないことが沢山あって、特に壁の中がどのようなになっているのかは壊れてしまわないとわからない。



いきたいというのが基本的な考え方です。

右下の写真は、引き倒し実験といって、壊れた建物、これは焼けてしまったお寺なんですけど、それを引き倒して、どのくらいの力で壁が壊れるのかを実験しています。焼けてしまったものとはいえ、本当は残したかったのですが、もう再建、新築するということで残せないことになったので、17世紀頃の建物ですから忍びないのですが、実験台として使わせていただきました。職人さんへの聞き取りなども行っています。



次はインドネシアの町並みです。右下の写真にあるように、1階がお店になっていて2階に住んでいるというショップハウスの町並みがある。スマトラ島にある町ですが、これも地震で壊れて、そこから始まった事業です。歴史地区、特に古い建物が残っている地域の被災状況を調べてほしいということで、ユネスコとインドネシア政府から支援要請を受けて、2009年から始まった事業です。ユネスコの事業はすぐに終わったのですが、その後も文化庁の予算や、最後には参加している専門家たちが科研費を申請して、主に都市計画と建築、それから社会学、これは色々な民族が住んでいる町ですので、そのような部分についても研究を続けています。

その中で、これは日本でもそうですが、町並みを残すといっても、そこに実際人が住んでいるわ

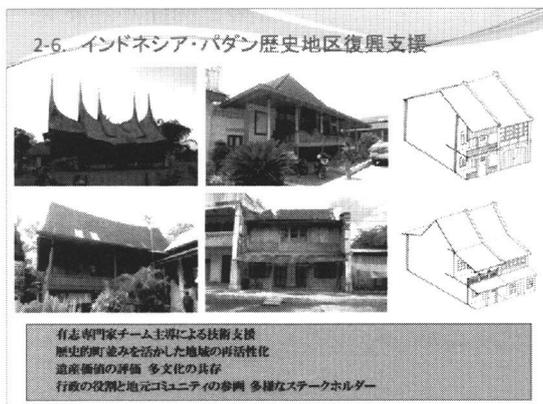
ここに示したのは、まだ結論が出たわけではありませんが、民家の類型です。色々な民家を見ながら、いつ建ったかを家の人に聞くと、100年前とか200年前とか、おじいさんが住んでたとか、そのような言い方しかしませんが、なかなかわかりませんが、多くの建物を調べていくと、やはりこちらのほうが古いやり方なのだろう、というようなことがだんだんわかってきます。本当に単純に言うと、窓が少ないほど古いとか、壁が厚いほど古いとか、

左上の写真で壁の中に丸太が突っ込んであります。2つの壁、間仕切壁と外壁がぶつかるところに丸太を入れている。ただ土壁だけを突きつけているのではなく丸太を入れて補強している。あるいは、下の絵にあるように角の部分にこのように丸太を入れるなどという伝統的な補強の仕方が色々あることがだんだんわかってきました。これから新築する時にも、今では失われてしまったこのような伝統技術をなるべく活かしながら、より安全な建物を造って

けですから、ただ単に保存しなさいということはなかなかできなくて、いかに活用しながら、使いながら残していけるかが大きなテーマになります。当然、住民の方々の意見を聞かなければいけませんので、今までインドネシアではあまりそのような発想が無かったのですが、地元のコミュニティ、住民が参加するような形での町づくり、保存の検討を何とか進めていきたいということで、ようやく地元の行政も理解し始めて、徐々にそのような方向に向かい始めているところです。

このような事業を行う中で、それぞれの課題に応えることはもちろんですが、私としては、ちょっとそれだけではおもしろくないところがあって、やはり、何か新しい研究的なテーマにつなげていきたいといつも考えています。

先ほどのブータンの例ですと、例えば、版築の技術ということがありました。パダンの例でも、中華系の人たちとミナンカバウ族というマレー系の人たち、それからインド系の人たちが、一緒というよりは、町の中でエリアごとに住み分けているのですが、最初は、ショップハウスなら全部中国的なものだろうということで、インドネシアの人たちもそのようにしか思っていなかったのですが、調べていくうちに、どうもミナン系のショップハウスというものがありそうだと感じてきました。



左の図でいうと、上のものが中華系のショップハウスで、下のものがミナン系のショップハウス。私が勝手にそういう名前をつけたのですが、屋根の形が違うとか、広いバルコニーがあるとか、色々違いがあります。これは何から来ているのかとどんどん溯っていくと、このパダンの町の中に真ん中上の写真のような独立住宅があって、さらに周りに行くと、左上の写真のような、ミナンカバウ族の民家として一番有名なものまで全部つながっていく。そのような土着のものが、

中国との関係であるとかマレーハウスの影響であるとか、いろいろなものと混じり合いながらできたのが、このミナン系のショップハウスなのだという事になりました。パダンの町というのは、他のインドネシアの町に比べて特に歴史的価値が高いかということ、必ずしもそうではないのですね。新しい建物も沢山ある中で、いかに特徴を見つけて、これを残さなきゃいけないんだと言うためには作戦が必要ですし、地元の人にこのような話をすると、今まではありふれたものだと思っていたけど実は大事なのだということがだんだんわかってもらえるようになります。ですから、ただ単に研究的な興味だけでなく、残すための意義づけという意味でも、このようなことが非常に重要になってくるわけです。

次はミャンマーです。今、私が係っている仕事で一番大きいのがネパールとミャンマーで、ミャンマーでは主に2つの仕事をしています。



一つは、バガン遺跡という、アンコール、ボロブドゥールと並んで東南アジアを代表する遺跡群ですが、バガン遺跡の煉瓦造の寺院遺跡に関する仕事をしています。それから、もう一つが木造の僧院、仏教僧院です。お坊さんが今でもいるのですが、その木造の建物を保存すること。バガンに関してはユネスコの事業で、木造に関しては文化庁の予算を使ってやっています。

ユネスコの事業は、私が一専門家として参加をしていて、他の色々な国々、イタリア、フランス、ドイツ、イランなどの人たちが専門家として参加して一緒に仕事をしています。



文化庁の事業は東文研（東京文化財研究所）の受託事業で、同僚たちや外部の専門家が参加して行っています。私は主に木造建築関係を担当していますが、壁画の修復であるとか、漆の保存。そのようなことにも同僚たちが取り組んでいて、それを全部セットにして一つの支援事業という形になっています。

何故ミャンマーかと言えば、最近、民主化ということで政治の体制が変わって、経済的な部分でどんどん日本企業が進出していますが、そのような日本とその

国との関係強化の一環という、かなり外交的な思惑もあって、文化協力が行われることも事実ではあります。

ここで一番重視しているのは人材育成です。ミャンマーの場合、特に西側の諸国と関係が途絶えた時代が長かったので、専門的な人材や知識が不足しています。ですから、人材育成が急務なのですが、実際に建物も含めて文化財がどんどん壊れている中で直していかなければいけないのに、お金もなければ人もいない、伝統的な技術も途絶えている。無い無い尽くしみたいところがあります。アンコールのようにぼーんとお金をつけて日本人がどんどん出ていってやるというものも一つのやり方ですが、今はなかなかこういう文化面に大きな予算が付かないのでそのような形も難しい、ということで非常に苦労しながらやっているのが現状です。

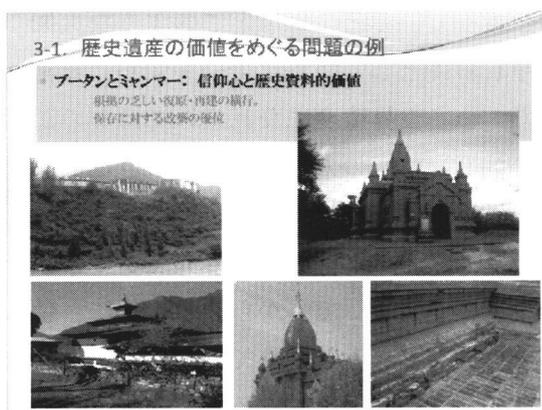
3. 課題と関心の所在

さて、これまで色々な事業を紹介してきましたが、このような事業をやっていく中で、どのような問題があるのかについて少しお話をしたいと思います。

先ほどの話と重複する部分もありますが、2つほど例を挙げたいと思います。

一つは、文化財、国際協力の場合は文化遺産という言葉を使うことが多いのですが、文化遺産の価値をどこに求めるのかということです。色々な捉え方がありますが、一つの捉え方として、昔のを知る手掛かりということがあります。例えば、先ほどブータンの話で、今は無くなってしまった技術が昔の建物を調べるとわかると言いました。これは当然、その物自体が無くなってしまえば、永久にわからなくなってしまうわけです。ですから、そのような過去のことを知るための情報源あるいは実物資料として物を残さなければいけないということがあります。これは、今、日本で文化財という場合にかなりウエイトとしては高い側面じゃないかと思います。

ところが、このようなことに全く価値を認めない人たちもいます。ブータンとミャンマーがその典型的な例です。特にどちらも仏教国で国民の皆さんも非常に信仰心が篤い。とてもお寺を大事にしている方々です。そうすると、なるべくお寺をきれいにしたい、立派にしたい。壊れている状態は見るに忍びないということで、どんどん直してしまうのですね。文化財の修理ということではなくて、篤志家が自分で稼いだお金を寄附して、このお寺をきれいにしてくださいと。例えば、真ん中の下はミャンマーのバガン遺跡ですが、金ぴかの物が塔の上に載っています。昔はこのような物はなかったはずですが、なるべく立派にしたいということで、このような物ができる。



左下は、ブータンでも一番古いお寺の一つですが、三重の屋根が載っています。もともとは普通の切妻という三角の屋根が載っていたのですが、それを改修した時に、このような金ぴかの三重の屋根になった。ですから、元の形の通りに直すことは彼らにとっては全く重要ではなくて、それよりも、より立派にしたい、より大きくしたいということが価値観としてあります。

右の上下の写真もバガンの遺跡ですが、遺跡と言っているのでしょうか、実はつい最近建ったものです。

この建物の足元の部分は発掘して出てきた。ここから下は古いのですが、その上は全部新しく建てたものです。ですから、平面的な形以外はほとんど何の根拠もないものです。こういうものが増えていくと、どれが本当に古いのかもよくわからなくなってきてとても困るのですが、彼らにとっては、こういうことをすると功德が得られる。自分のお金を寄附してお寺が建ったら来世でもっと幸せになれる。そのようなことを信じて疑わない人たちが沢山いるわけです。それ自体は否定できないですね、絶対に。とても大事なことだと思います。ただ、片や、歴史的な価値、文化財としてのオーセンティシティ、本物が何かということは、やはり残していかなければいけないわけです。ですから、そのような部分で非常にジレンマというか葛藤、どのようにしたら両立できるのかという難しい課題があります。

左上の写真は、ブータンのお城で、ウォンデュボタンという非常に素晴らしいお城なのですが、2012年に漏電火災で全焼してしまいました。これは焼けた後の写真で、木造の部分は全部焼けてしまったのですが石造の部分は残っているのですね。ですから、石造の部分だけでも使って再建するのだろうと思っていたら、全部壊してしまうそうです。焼けたから、言い方は悪いかも知れませんが、それをチャンスとして、より立派なものを建てよう、より大きなものを建てようという発想が基本にある。当然、文化財を扱っている人たちは、ブータン人といえども、そのようなことには与しないのですけれども、なかなかそのような意見は多数派にならないのが実情です。ですから、これも取り壊して、新しい建物が鉄筋コンクリートで建てられることになるのかもしれない。

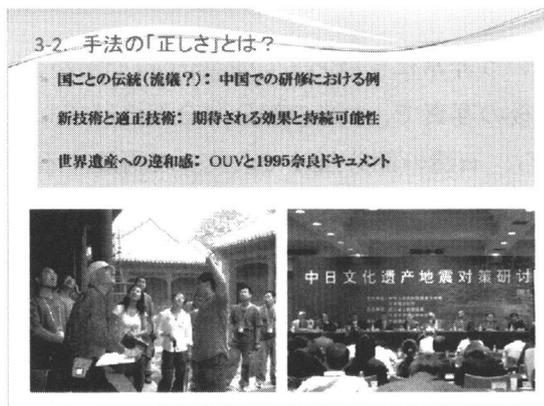
次の例です。文化財の価値と言ったときに、誰がつくったのか、誰の文化なのかということが、日本の場合はあまり問題になりませんが、多くの国々と国境を接している国や、民族が変わる中で様々な問題が生じてきます。先ほど、ベトナムのタンロンの例を挙げましたが、中国に支配されていた時代があり、独立のベトナムの王朝があって、その後、またフランスが入ってきて植民地化され、そこから独立を回復して、またアメリカと戦ってと、色々な時代があるわけですね。では、その



の全部をベトナムの歴史というのか。あるいは、ベトナムの独立の国があった時代だけをベトナムの歴史と言うのか。これは非常に難しい問題です。先ほど言いましたように、最後の時代の建物の外観写真しかないからきちんと再建できるはずはないと思うのですが、植民地時代の建物を壊して再建したいという意見が非常に強い。

それから、右側の写真はモンゴルで、首都のウラン

パートルから車で7時間ぐらい何もない大草原の中を延々と走っていると、忽然とこのような大伽藍があります。アマルバヤスガラントという仏教寺院で、今もお寺として使われていますが、非常に厳しい環境の中にありますから、どんどん壊れていくのですね。世界遺産になれるのではないかと僕は思っていて、残していきたいのですが、なかなかモンゴルの人たちはそのような動きにならない。なぜかと言えば、このお寺はもともと雍正帝という中国の清朝の皇帝が建てさせたお寺なのです。当時はモンゴルのチベット仏教の活仏が清朝の皇帝の先生だった。その先生が生まれたところに皇帝がお金を出して資材を運んでつくったのがこのお寺です。ですから、この額に、勅建慶寧寺、慶寧寺というのは中国名ですが、勅によって建てられた慶寧寺と書いてあります。そうすると、モンゴル人にとっては、これは自分たちのものではない、中国人がつくったもので、しかも、中国が半分モンゴルを侵略していたような時代につくられたものだから、自分たちの歴史の一部としては認めない。あるいは恥だというような感覚が、全部ではないにしても、一部の人にはあります。だから、これをモンゴルの代表的な文化遺産として世界遺産にしようという話にはなかなかならないわけです。ただ、実際にこれを細かく見ていくと、必ずしも中国建築そのものではなくて、このような建物、実は中国にはないのですね。非常に変わった形をしていて、モンゴル特有のゲルというテント式のお寺があって、その形を中国の技術で模したものですので、言ってみれば、モンゴルと中国の文化が融合してできた非常に独特な造形であり、建築であるとは思っていますが、そのようなことはなかなか言っても理解をしていただけないというのが現状です。



もう一つ、修復の仕方、保存の仕方、残し方についても色々な考え方があります。何が正しいかというのはなかなか結論が出るものではありません。国によっても伝統的なやり方がある、流儀と言ってもいいですが、それぞれに違います。発展途上国の場合は、そのような伝統的な保存技術というものがありません。あるいは失われているために、日本でやっているやり方を受け入れてもらいやすい部分があります。ただ、例えば中国は、自分たちのやり方を非常に強く持っています。

中国に行って木造建築の調査の仕方について研修をやったことがあります。何ヵ月も泊まりこんで、いろんな省から専門家を集めて行った研修で、ほかの国々ですとかなりアマチュアに近い方々を相手にすることも多いですが、この中国の人たちは知識も経験も非常に豊富な人たちだったので、かなり高度な内容の研修をやりました。ところが、最後に、ある中国人の参加者から、「どうもありがとうございました。日本での修理の仕方が非常によくわかりました。だけど、私たちには私たちのやり方があります」と言われて、かなりがっかりしました。私たちは私たちのやり方が正しいと思っていますが、彼らは彼らのやり方にこだわりがあって、なかなかそれを変えようとはしない。どちらが一概に正しいということではないと思いますが、やはり、それぞれにどのようなメリット、デメリットがあるのかというような議論を積み重ねていく必要があると思います。

それから、もう一つの問題として、新しい技術と適正技術ということがあります。日本から支援をするというと、日本は非常に技術が進んだ国なので、最新の技術を持ってきてくれるだろうと期待をされるのです。ところが、必ずしも最新の技術がいいのかということではなくて、最新の技術が必要ない場合もたくさんありますし、最新の技術を持ち込んだとしても、機械がなければ何も

できない。例えば、最新のレーザースキャナーを持っていったとしても、レーザースキャナーをあげられるならいいですが、持って帰ってしまっただけに彼らに機械がなければ、せっかく学んだことを全然生かすことができない。そのようなことはたくさんあります。ですから、その国の状況に応じて、「適正技術」と言っていますが、なるべく彼らが活かせるような技術は何なのか、持続可能性というところちょっと難しい言葉になりますが、やはり、ちゃんと続いていくようなことを教えないと、元も子もないだろうと思っています。

それから、手法という意味では、世界遺産が盛んにもてはやされていますが、世界遺産というのはかなりやり方を限定していて、このような形で残しなさいなどということがいろいろと決められています。まず価値評価として、顕著な普遍的価値、OUVと言うのですが、というものを最初に決めて、それに基づいて登録をする。そうすると、残すべきものは、あくまでもその価値であるということが逆についてくる。それ以外の価値は残さなくていいのかという話に逆転が起きるのです。このあたり、日本も巻き込んでかなり議論が続いていて、OUVの範囲も広がりつつあり、国によって、文化によって、非常に多様なのだということを認める方向にはなっていますが、それでもなお、そのような問題があるのは事実です。

最近も産業遺産が日本で世界遺産になりました（2015年7月「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が世界遺産に登録）が、韓国との間で色々な問題が生じたのは皆さんも御存じだと思います。その遺産に対してどこに価値を認めるのか。あくまでも産業発展、産業革命ということ価値として日本は推したわけですが、片や、そこに韓国や中国の人たちはある負の遺産としての価値を見出した、あるいは求めようとしたという点で、非常にすれ違った議論だったと思います。人によって、どこに価値を置くかも様々ですが、世界遺産というのは何かそれを非常に単純化しようとするシステムだと、私は感じるがあります。

3-3. 自分の役割とモチベーション

- 事業の企画・運営と研究者としての立場
- 国際貢献という「大義」：特にODAにおいて
- モノに対する責任：「人類共通のかけがえない遺産」
- 知的好奇心



さて、私が今どのような立場でこのような仕事にかかわっているのかについてお話をしたいと思います。一つは、事業を企画したり運営したりする、プロジェクトマネージャーとか、コーディネーターという立場です。今、紹介してきた仕事の中では、そのような役割をそれぞれ私が担っているわけですが、同時に、私には建築史の研究者あるいは文化財保存の研究者としての立場があります。ですから、そのような事業運営を行いながら、自分としての研究的なテーマを常にそ

れぞれのプロジェクトの中で見つけながら、研究者としても貢献することを模索しています。国際貢献という話になると、どうしても政治的な思惑から逃れることはできません。それから、特に税金を使って行っている事業に関しては、皆さんも含めて国民に対してきちんと説明ができなければいけない。何でそのようなことにお金を使って日本がやらなければいけないのか、日本の国民にとって、国にとって、どのような価値、メリットがあるのかを説明する必要があります。ただ、それと同時に、日本の国に対して役に立つからということだけでやっているのではなく、私も含めて一人一人の専門家がそこに参加している一番大きなモチベーションとしては、素晴らしい物がそこにあるので何とかそれを残していきたい、という物に対しての責任ということが一つ。それから知的な好奇心ですね。見たこともないようなものを見たときに、これは何なのだ、どのような人がつく

ったのだ、どのようにしてつくったのだ、そのようなことを知りたい。そのような好奇心が、やはり、このような仕事をする上での非常に大きな原動力になるだろうと思っています。



建築史の研究者としての関心は何かと言えば、アンコールワットの場合ですと、インドの古代的な宇宙の構造をここにあらわしている、そのような建築なのです。このように、ある思想、哲学を形にするということが古代には行われていた。最初はそのようなことに非常に関心が強かったのです。そこから、逆に、このような物を残して、あるいは研究していくことによって、物の中に隠れていた価値がだんだんと見えてくるということがあり、それが保存活用の一つの大きな目的なのだと思います。それと同時に、様々なスタイルの建物が国ごとにありますが、その背景には、それぞれの文化の中で受け継がれてきた技術があります。そのことへの関心が非常に強くあります。特に東南アジアでは、石造あるいは煉瓦造の建物ばかりが残っていて、古い木造の建物はあまり現存していないのですが、実は上の右の写真のような木造の建物のほうがはるかに沢山あったはずなのです。ただ、今は残っていない。そのような東南アジアの木造の技術あるいは文化はどのようなものだったのかというようなことも、これから色々な国々で仕事をする中で、関心として持ち続けていたいと思っています。

同時に、技術移転として、日本の得意分野、私の場合ですと木造建築の修理技術ということになりますが、それがどこまで適用できるのか。日本は日本でかなり独自に発展してきた部分があって、国際的なスタンダードからはかけ離れている部分も相当あります。ですから、なぜこのようなやり方をするのかということを、ほかの国々、特に欧米先進国の技術者に対して、きちんと説明できる必要があります。それはそのような技術を教える相手の国々に対しての責任でもあるわけですが、そのような意味で、日本の文化財保存はまだ理論化がされていない。これをきちんと理論化して、ポリシーを持ってやっていくということが、これからますます必要になるだろうと思っています。

4. 「異文化交流」について思うこと

最後に、異文化交流とは何かということですが、私は自分が異文化交流していると意識したことは実はあまりありません。言われてみれば、多分異文化交流なんだろうとは思いますが、ほかの国の人と一緒に仕事をしていても、この人、異文化だなと思うことは実はないんです。それはなぜ

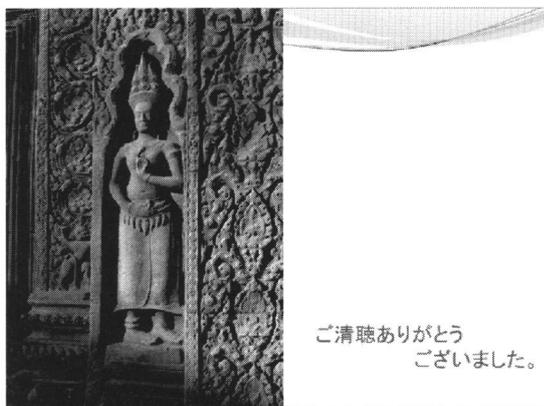


かと考えると、ちょっと逆説的な言い方ですが、もともと人間同士などは理解し合えないのではないかなと思うところがあって、もちろん理解し合えばそれに越したことはありませんが、最終的には、私とこの人、私とインド人、私と中国人はもちろん違うし、私と橋本先生も違う。最終的には理解し合えない。身も蓋もない言い方ですが、そのように考えると、逆に違っても、違いを非常に受け入れやすいと思います。外国の人を理解できない以上に理解でき

ない日本人など幾らでもいると思います。ですから、日本人であるとか、日本民族であるとかいう以前に、やはり、個人として、人と人が接するということがまず出発点としてあって、それを重んずる限り、国が違って、民族が違って、あるところまではわかり合えるのだろうと。なかなかわかり合にくい人たちはもちろんいますが、本当に腹を立てるところまではいかないのではないかと思います。ですから、国と国とのつき合いと個人同士のつき合いとは分けて考える必要があって、いかに韓国や中国と関係が悪くなっても、我々は淡々と中国人とも韓国人とも一緒に仕事をしますというのが基本的なスタンスです。

それと同時に、違う文化を持った人たちと接する中で、自分が背景としている文化、私の場合ですと日本という文化について、きちんと学んでそれに自信を持つことが非常に重要だと思っています。お互いに、個人の性格ももちろんですが、バックグラウンドとしている文化に対しても敬意を払うことが重要ですし、敬意を払われるためには、自分も自分の文化に対して自信を持っていないといけない。それについて知らなければ、身につけていなければいけないと思います。

違うことは違いとして認めながら、違うもの同士がぶつかったときに、よりおもしろいものがそこから生まれるのではないかと。建築でも何でもそうです。先ほどモンゴルのお寺の話をしました、違う文化がぶつかったときに、そこで融合して出てくるもの。日本にも日本の大工さんが西洋の建築を真似してつくった建物が沢山ありますけれども、そのようなものは非常におもしろいと思うのです。そのようなものが全体としてさらに世界の文化を豊かにしていくことを期待して、色々な国の人たちと接していく。そのように大上段に構える必要はなくて、だけど、色々な人と仲よくしている中で、だんだんとそのような豊かな世界が生まれるのではないかと、ということを何となく期待していれば、違う国の人、違う文化の人との交流も、より楽しいものになるのではないかと、というのが私の結論です。



ご清聴ありがとうございました。

ご清聴ありがとうございました。